2021（令和三）年度　早稲田大学国文学会秋季大会プログラム

12月3日（金）　於・Zoomミーティング

16：30〜17：30　**評議員会**

12月4日（土）　於・Zoomミーティング

10：00〜15：25　**研究発表会**

和歌における物象と人事との関係について——十二〜十三世紀の古注を手掛かりに——
フィットレル・アーロン

都市空間の中から時代病を読むことの可能性——谷崎潤一郎「秘密」を中心に　林　青

男たちを暴く場——三島由紀夫「美しい星」の妊娠表象をめぐって　三林　優樹

ワープロ文学の誕生　山西　将矢

日本語における特異な引用構文について　久賀　朝

『保元物語大全』『平治物語大全』の物語読解と教訓性の行方
——軍記物語の古注釈書の一端——　滝澤　みか

近世後期江戸語における丁寧な言葉遣い——〈行く・来る〉を例にして——　山田　里奈

15：40〜16：40　**講演会**

活字出版書肆の黎明——ある出版人のこと　山田　俊治

16：50〜17：30　**総会**

※今年度はオンラインで開催いたします。参加方法については裏面の「秋季大会へのご参加に関するお願い」をご覧ください。

和歌における物象と人事との関係について

——十二〜十三世紀の古注を手掛かりに——

フィットレル・アーロン

序詞や掛詞という、物象と人事を結びつける修辞法に、「序」や「兼用言」または「掛詞」などといった名称が、こういった技法が盛んに用いられていた奈良、平安、鎌倉時代にはほとんど付されていなかった。序詞に関してのみ、為家の『八雲口伝』に「序」とあり、鎌倉末期の成立とされる『桐火桶』に「序歌」とあり、その概念があったことがわかる。しかし、たいてい、用語の代わりに当該歌に詠まれている物象と人事との関係の説明が、古注類にしばしば見られる。平安・鎌倉時代の和歌における掛詞などの同音異義表現と序詞の人事との関係に関する理解がより正確に把握できるのは、『古今集』などの十二〜十三世紀の古注釈におけるこういった説明を通してであると考えられる。前述の修辞法における物象と人事との関係の説明として使用されている語に「そふ（添ふ）」、「よす（寄す）」、「〜の／がやうに」、「〜の／がごとく」と「よそふ」が見出せる。掛詞と縁語の場合、使用されている掛詞と縁語の性質、また序詞の場合、比喩式であるのか、または同音反復式・掛詞式であるのかによって、右記の語が使い分けられているという傾向が見られる。管見のかぎり、「そふ」という語が用いられている注記に、説明の対象となっている掛詞、序詞の中の景物と人事との性質が異なるということが共通する。一方、説明の対象となる景物と人事とが類似する性質を持っている場合、「〜の／がやうに」、「〜の／がごとく」、または「よそふ」という語が用いられている傾向がある。

本発表では、十二〜十三世紀の古注類に見られる、物象と人事との関連についての説明を検討し、「そふ（添ふ）」、「よす（寄す）」、「〜の／がやうに」、「〜の／がごとく」、「よそふ」という語の使用傾向について見ていきたい。また、これを通して、当時の人の掛詞や序詞への理解、物象と人事の関係についての捉え方について考えたい。

都市空間の中から時代病を読むことの可能性

——谷崎潤一郎「秘密」を中心に

林　青

大正初期の谷崎はいくつかの時代病に関する作品を書いた。「恐怖」（大正二年）では汽車に対する恐怖症いわゆる鉄道病を、「人面疽」（大正七年）では自分の知らないところでもう一つの自分が存在するという自己分裂を、「病蓐の幻想」（大正五年）では神経衰弱と極端な地震恐怖症に悩んでいる主人公を描いた。その病いの背景には、文明開花による近代化・都市化の加速、電気や鉄道の普及、生活様式の激変などと関係がある。「昨日のものがもう今日では古くなる」（川本三郎　『大正幻影』　新潮社　平成二年）といった速度を追求する近代社会はゆっくりした時間の流れを破壊し、人を焦燥・不安・恐怖に巻き込む。そうしたなかで、日露戦争後から大正期にかけて鉄道病、神経衰弱、自己分裂などの近代特有の時代の病い、いわゆる文明病が社会的な問題として広がるようになる。

「秘密」（『中央公論』　明治四四年）はちょうどこのような時代病が話題になる明治四四年に生まれた作品である。しかし「秘密」の研究は大きく三つの観点にわけられる。第一に光と闇に着目した論点、第二に「私」の女装とアイデンティティ、セクシュアリティなどを中心とした考え方、第三に犯罪・探偵小説や見る／見られるといった視覚問題をとりあげた論などがある。

「秘密」と時代病との関連性を具体的に論じたものは見当たらなかった。あるのは川本三郎の『大正幻影』（「自己分裂という物語」「神経衰弱と死」）のような大正作家を中心とする全体像分析であった。そのため、本稿では「気紛れ」で「刃の擦り切れた」神経状態にある「私」の分裂や場所の移動に注目し、「秘密」と近代の時代病との関連性を読み取るのが趣旨である。

男たちを暴く場

——三島由紀夫「美しい星」の妊娠表象をめぐって

三林　優樹

三島由紀夫「美しい星」（一九六二）は、冷戦下での核戦争恐怖を描いたＳＦ的作品である。そのため本作の先行研究では、核戦争をめぐる三島の小説意識の問題や、それと照応する小説の語りの構造が主に論じられてきた。しかし作品に現れる「処女懐胎」という特異な妊娠表象がどのような意味の場を構成するのかという論点は、ほぼ等閑視されてきたと言ってよい。「処女懐胎」についての思考が登場人物の宇宙人自認の論理の一端を担っているという物語展開を踏まえるなら、この妊娠表象には作品を再考させる余地がある。

よって本発表では、作品の「処女懐胎」を中心とした妊娠表象がどのように意味付けられるかを検討するために、まず子どもを産むことになる大杉一家の娘・暁子の妊娠への意味付けを分析する。当初暁子にとって「処女懐胎」とは「純潔」から成る宇宙人の証明としての意味をもっていた。しかし妊娠をもたらした竹宮と父の嘘が暴かれることによって、彼らのホモソーシャリティを退ける想像力へとその意味付けが変化することを提示する。

次に、作品における妊娠は、女性が経験する場だけでなく、男たちによって語られ議論をひらく言説討議の場でもあることを分析する。男たちは妊娠に対して人工妊娠中絶や不妊妄想の暴力的な思考を繰り広げるが、しかしそれらは男性性的なヘゲモニーを構築しない。妊娠表象が男たちの妄想を異化し暴露する場であることを論じる。

また、以上の妊娠表象を踏まえ、「美しい星」では暁子が人工妊娠中絶を選択しない点に着目する。この点について、作品で人工妊娠中絶が意識的に選択される「美徳のよろめき」（一九五七）を参照しながら、人工妊娠中絶が前提とする障害の問題を「美しい星」もまた前景化していることを論じる。以上の論点によって「美しい星」の妊娠表象プロットの位置づけおよびそれが抱える問題系を考察したい。

ワープロ文学の誕生

山西　将矢

本発表では、ワープロと日本文学の関係について考えてみたい。

宗像和重は「制度としての原稿用紙」という論文において日本の近代文学はすべて原稿用紙に書かれてきたと指摘し、その結び付きは単に書くことの範囲を超えて個人と社会の関係そのものが表象されているのではないかと考察している。同様の指摘は柄谷行人にも見られ、彼によれば日本の近代文学は枡目の記された原稿用紙に閉じこめられて存在してきた。二人の論を総合すれば原稿用紙という枡目の窮屈さと近代の家制度は重なりそれは書かれたものにも影響している、ということになる。

このような「制度としての原稿用紙」の議論を引き受け、私は「制度としてのワープロ」について考えてみる。日本語の複雑さに起因してタイプライターの普及しなかった日本では、ワープロは紙筆以外の手段を用いた最初の執筆方法（タイピング）であり、物質性に依存しないコンピュータに書くことがはじめて開かれた瞬間であったにもかかわらず、今までその事実についてほとんど論じられることがなかったからだ。同時代に誕生したインターネットや来るべきテクノロジーとしてのハイパーテキストやＶＲに比べその重要性は軽んじられている。

しかしワープロが齎した衝撃は安部公房や曾野綾子、小松左京といった作家たちの証言、ワープロ関連の文章や指南書の増加などを見ればよくわかる。

ワープロ受容の背景とそれにより文学に起きた変容を笙野頼子、神林長平、小林恭二の作品に即して論じワープロ文学の誕生について検討してみたい。ワープロ文学とはワープロの無限の修正可能性に根差した、言葉は自由であるが故に不自由だという認識を描いた作品である。言葉は枡目／家制度と同様人を束縛し、言葉の自由＝不自由さは世界のそれとアナロジーを成している。

この三人の作家は人間が世界＝言葉に閉じこめられた存在であることを明らかにしたワープロ文学の代表として捉えられるのだ。

日本語における特異な引用構文について

久賀　朝

本発表では、「『おはよう』と入ってきた。」のような引用構文を考察する。この表現では、引用句（「『おはよう』と」）と述部（「入ってきた」）が別の動作を表している。典型的な引用構文では、「『おはよう』と言った。」のように、発話・思考を表す引用動詞を伴う。これと比較すると、冒頭の例文は特異な引用構文であると言える。

先行研究では、特異な引用構文について、二つの立場がある。一つ目は、引用動詞が省略されているとする立場である。この見方の問題として、動詞を一義的に復元できないため、省略とは言えないという点などがある。二つ目は、一つ目の見方を批判する立場である。この立場では、引用句は、元の発話をそのまま引き写すため、それ自体で述語相当の表現性を持つという。さらにその引用句は、述部を副詞的に修飾すると説明される。この立場の問題として、引用句の後に引用動詞が無いことによる不足感、すなわち母語話者の言語直観に合致しないという点がある。

本発表では、これら二つの立場を踏まえて、次の三点に着目する。一点目は、位相的な偏りである。特異な引用構文は、用例のほとんどが書き言葉であり、話し言葉では用いられにくい。二点目は、スクリプト性である。特異な引用構文が成立するためには、引用句・述部のそれぞれが示す動作が、想起される一連の動作の流れ（スクリプト）に適合している必要がある。三点目は、母語話者の言語直観である。特異な引用構文の解釈にあたっては、「引用句の後には引用動詞が存在する」という、典型的な引用構文からの類推が関係する。それゆえ、引用動詞が省略されているとする言説が現れるものと思われる。

以上の点から、共時的には、典型的な引用構文が引用の基本構造であり、特異な引用構文はその拡張的用法であると考えられる。この見方により、母語話者の言語直観を重視しつつ、引用構文全体を位置付け直すことが可能になるものと思われる。

『保元物語大全』『平治物語大全』の物語読解と教訓性の行方

――軍記物語の古注釈書の一端――

滝澤　みか

軍記物語に分類される作品の一つである『保元物語』『平治物語』の注釈書としては、江戸時代に水戸藩により制作された『参考保元物語』『参考平治物語』（＝参考本。共に一六九三刊）が著名である。この参考本は以降の両物語享受に大きな影響を与えたが、両物語の注釈書の歴史を顧みると、参考本成立以前に、西道智により『保元物語大全』『平治物語大全』という、語釈・批評を記した書が作られていたことはあまり知られていない。道智が近世前期の寛文年間（一六六一～一六七三）に生存・活動した人物であることを考えると、両書は流布本段階の『保元物語』『平治物語』が成立してから最も古い注釈書である可能性が高い。すなわち、この書の物語に対する解釈を捉えることは、近世前期における両物語の享受の様相を探るのみならず、流布本両物語の読解の実態や、軍記物語を理解する際にどのように思考を巡らすのか、あるいは解釈する際にどのような知の繋がりが発生していくのかということを捉える手掛かりにもなろう。本発表では、以上のような問題意識のもと、『保元物語大全』『平治物語大全』の特性の検証を行うことで、中世に成立した軍記物語が、以降どのように読まれていくのか、その一端を明らかにしたい。

『保元物語大全』『平治物語大全』の内部を検証すると、批評部分において例えば「智」やそれに類する言葉を多用している。それは流布本両物語には頻出はしていなかった言葉であり、本文とは別の視線で作品を読み解いていることが分かる。加えて、教訓性を強く帯びる流布本とはまた別に、独自の教訓的見解を述べる姿勢が批評部分より窺えることから、両書は流布本両物語の読解という形を持つものの、独自の世界を持っていると言える。登場人物の捉え方も必ずしも流布本における評価と一致するとは限らず、両書を検証することは、流布本が持つ教訓性の持続の問題を考えることにも繋がっていると言える。

近世後期江戸語における丁寧な言葉遣い

――〈行く・来る〉を例にして――

山田　里奈

本発表では、近世後期江戸語における丁寧な言葉遣いについて述べる。

まず、文末における「ます」の使用状況を概観し、「ます」を下接して使用する場合の傾向を明らかにする。そして、特殊形（尊敬語であれば「いらっしゃる」「おいでなさる」、謙譲語であれば「うかがう」「あがる」「さんず」「まいる」「めえる」等）を持つ〈行く・来る〉の意味を表わす表現に焦点を絞って、体系的把握を試みる。

近世後期江戸語は、丁寧語のうち、「です」が未発達である。近世後期江戸語から明治期東京語にかけて丁寧語「です」が一般化し、「です」「ます」「ございます」という丁寧語の体系が揃っていく。そのため、例えば、丁寧な言葉遣いをする会話であっても、近世後期江戸語では、「まいる」（「ます」を下接しない形）を文末で用いる例が見られる。現代語では「まいる」を文末で用いる場合、必ず「ます」を伴う。文末で「ます」を下接なしで使用する場合は武士言葉的であるとされるが、中流女性（子ども）同士が普通の会話で使用する例が見られ、武士言葉として用いられているわけではない例が、数は少ないが認められる。

命令形による命令についての論考ではあるが、小松寿雄(1961)では「まし」があったりなかったりする待遇段階を認めている。命令形による命令以外で、「ます」を下接させる表現を用いる場合と用いない場合とを比較することで、「まし」のあったりなかったりする段階をより詳しく記述することができると考えられる。また、「ます」を下接する場合も、丁重語として文末で使用する「まいります」と丁寧語を伴なって使用する「行きます・来ます」との使用の違いについて説明した論考も管見の限り見られない。本発表で、これらについて明らかにすることにより、近世後期江戸語の丁寧な言葉遣いとその体系の一端を示し、現代語との比較を可能にできると考えている。

研究発表者紹介

フィットレル・アーロン　早稲田大学高等研究所講師（任期付）

林　青　大学院文学研究科科目等履修生

三林　優樹　大学院文学研究科修士課程二年

山西　将矢　大学院文学研究科修士課程一年

久賀　朝　大学院文学研究科博士後期課程一年

滝澤　みか　名古屋市立大学講師

山田　里奈　日本女子大学学術研究員

【秋季大会へのご参加に関するお願い】

・本年度の研究発表会、講演会、総会はZoomミーティングにて開催いたします。

・ご参加を希望される場合は、**11月30日（火）**までに下記のGoogleフォームよりお申込みください（右のQRコードもご利用できます）。

https://forms.gle/NUsyneiuGzVLznLW7

＊フォームには、日本語日本文学コースHPからもアクセスできます。

http://www.waseda.jp/bun-nihon-go-bun/

・お申込みいただいた方には、秋季大会前日までに事務局よりZoomミーティングの情報や発表資料の掲示などについてご連絡いたします。

・発表資料やZoomミーティングの情報などについて、他の方と共有されませんようお願い申し上げます。

・ご不明な点などありましたら、事務局（wkokubungakkai@gmail.com）までご連絡ください。